

イスラム雑誌 『カラム』の風刺画

山本博之

2015年初頭、フランスの風刺週刊新聞の編集部が武装した男らに襲われ、12人が殺害される事件が起こった。この週刊新聞はイスラム教の預言者を題材にした風刺画をたびたび掲載してイスラム教徒の反発を買っており、また、襲撃事件の直前にはイスラム教徒を過激派として挑発するような風刺画を掲載していたことなどから、この襲撃はイスラム教やイスラム教徒への揶揄に対する抗議が暴力的な手段を取ったものと理解され、表現の自由はどこまで許されるのか、また暴力的な手段により抗議することが許されるのかといった議論が起こった。

本稿では、これより約50年前のマレー・イスラム世界において、政治指導者や宗教指導者に対する厳しい批判で知られていたマレー語月刊誌『カラム』の誌面に見られるイラストをもとに、『カラム』による風刺について紹介したい。

『カラム』は20年間に229号が刊行された。記事には写真が多く使われ、また、写真・イラスト入りの広告も毎号のように掲載されていた¹⁾。ただし、記事に大きなイラストが描かれることは稀で、記事本文中に大きなイラストが入ったのは20年間で3回しかなかった。表紙にイラストが使われた2回を含めても、大きなイラストが掲載されたのは20年間でわずか5回しかなかった。以下ではこれらのうち表紙のイラスト1枚と記事中のイラスト2枚を取り上げる²⁾。

1. 新国王と新王妃

資料2-1の絵は『カラム』1961年12月号の表紙の絵である。この絵からどのようなメッセージを読み取ることができるだろうか。

絵の上の方に幕があり、中央には2人の人物の肖像



資料2-1

画が置かれている。どちらも立派な飾りを戴き、胸には勲章がいくつも見えるため、社会的地位が高い人物であることが伺える。

1961年頃のマレー・イスラム世界の主要人物と照らし合わせてみると、この男性はマレーシア(当時はマラヤ連邦)のサイド・ハルン・プトラ国王(1920~2000、在位1960~1965)であり、隣の女性はブドリア王妃であることがわかる。

サイド・ハルン・プトラ国王が即位したのは1961年9月なので、この表紙に掲載されたのは国王に即位する直前だったことになる。ということは、『カラム』は新国王と新王妃の即位を祝福して表紙に肖像画を掲載したということだろうか。これについて考えるには、この絵の肖像画以外の部分にも目を向ける必要があるが、以下ではまず『カラム』に掲載された他の2枚のイラストを見てみたい。

1) 『カラム』に掲載された写真については[坪井 2014; 2015]を、広告については[光成 2014]を参照。

2) 今回取り上げなかった2枚のイラストは、離婚率の高さ(表紙)とインドネシアの政治家の汚職(記事)をそれぞれ題材としている。

2. ローマ字かジャウィか

次のイラストは『カラム』1954年6月号に掲載された記事に添えられたものである(資料2-2)。男性が3人いて、1人は左に、2人は右に向かっている。

左向きの男性は恰幅がよく、腹がせり出しているのに対し、右向きの男性は2人とも痩せ気味で、奥の年配の男性の姿勢は前屈みになっている。

服装を見ると、左向きの男性が西洋風の背広を着ているのに対し、右向きの男性は腰に布を巻いたマレー人の民族衣装を着ている。右向きの男性が履いているのは白い普通の靴のようだが、左向きの男性の靴は黒く、おそらく革靴だろうと思われる。また、左向きの男性が書類入れのような鞆を持っているのに対し、右向きの男性は杖か剣のようなものを持っている。

左右に向かっている3人の男性の間には標識が見える。左側にはローマ字で「ルミ」(ローマ字)、右側にはジャウィで「ジャウィ」と書かれている。標識の左右には建物があり、左側にはビルのような四角く高い建物が、右側には特徴的な尖塔をもつイスラム風の建物が見える。

標識にある「ローマ字」と「ジャウィ」とはマレー語の表記に関する2つの方法である。かつてマレー語はジャウィ(アラビア文字)で書かれていたが、欧米諸国による植民地支配を経てジャウィはしだいに使われなくなり、学校教育などを通じてローマ字が普及していった。1950年代になるとマレー語は多くの場面でローマ字で書かれるようになり、ほとんどのマレー語雑誌がジャウィからローマ字に切り替えていったが、最後までジャウィによる雑誌発行を続けたのが『カラム』だった。ジャウィからローマ字への切り替えは、独立後のマラヤにおいて、欧米への留学経験がある政治指導者たちによる経済開発が進められていく過程と並行して進んだ。『カラム』にとってみれば、ローマ字かジャウィかという選択は、単なる使用文字の選択にとどまらず、欧米式の生活様式を受け入れるのかイスラム式の生活様式を堅持するのかの選択でもあった。

3. 団結すれば立ち、分裂すれば倒れる

次のイラストは、『カラム』の1951年4月号に掲載された記事の挿絵である(資料2-3)。

絵の中心は行く手を遮られた一群の人々で、最前列



資料2-2



資料2-3

の5人を見るだけでもさまざまな服装があるが、いずれもムスリムである。

人々の行く先は崖になっており、その下の海には人の顔をしたサメが2匹待ち構えている。一群の人々が海に落ちてくるのを虎視眈々と狙っている雰囲気だ。左側の魚の顔はアメリカのトルーマン大統領、右側の魚の顔はソ連のスターリンで、左側のサメの体にはドルマーク、右側のサメの体には鎌と槌を組み合わせた共産主義のシンボルが書かれている。第二次世界大戦後、トルーマン率いるアメリカを盟主とする自由主義陣営とスターリン率いるソ連の傘下に入った共産主義陣営に分かれ、世界の国々はアメリカ側かソ連側のどちらかにつくかが問われる状況に置かれていたことを示している。

ムスリムの一群が崖に着いたところで、目の前の海にはアメリカとソ連の二匹のサメが待ち構えている。看板には「イスラム教:一つの神、一つの人間社会」、「団

結すれば立ち、分裂すれば倒れる」と書かれている。世界がアメリカ(西側先進国)側とソ連(社会主義国)側に分かれる中、ムスリムが分裂したらどちらかの陣営の「餌」になってしまうという危機感がよく表れている。それを防ぐには、ムスリムが団結して、米ソの「餌」になるのとは違う道を選ぶ必要がある。絵の遠くにはドーム状の屋根や尖塔が特徴的なムスリムの社会のようなものが見えるので、崖から引き返してそこに向かう手があることを暗示している。

世界がアメリカ側とソ連側に分断されるという危機感は、現実のものとしてかなり強く感じられていた。創刊号である1950年7・8月合併号には韓国に関する記事がある(資料2-4)。ムスリム人口がほとんどない韓国のことをわざわざ創刊号で取り上げた背景を考えるならば、同じ国・同じ民族でありながらアメリカ側とソ連側に分かれて互いに戦争している韓国と北朝鮮の状況にかなり高い関心を持っていたことがわかるだろう。

4. 工場と伝統的家屋

本章の冒頭で紹介したイラストを改めて見てみよう。イラストの中央にあるのは即位を半年後に控えたマレーシア(マラヤ連邦)の国王と王妃の肖像画であり、肖像画の下には、二本の椰子の木の間に、遠くに二つの建物が見える。左側の建物は工場で、煙突から煙が出ており、その左側には船も見える。向かって右側の建物は高床式の家屋のようで、モスクにつきものの尖塔も見える。建物の奥に影のようなものが見えるのは木々が生き茂っていて緑が豊かであることを示している。空には白い雲が浮かんでおり、工場の煙は右側には流れてこない。

工場と伝統的家屋は隣どうしに建っているが、上で見たイラストに込められた意味などを考えると、このイラストは、自分たちマレーシアのムスリムが工業開発と経済発展を求める方向に進むのか、それとも自然環境や伝統文化を守る方向に進むのかという問いを投げかけていると理解できる。

言葉で書くと解釈の余地が狭まり、批判的な書き方をするのは難しいとしても、イラストにすれば、わかる人にはその意味が伝わるし、もしその意図が問われたとしても工場と伝統的な家屋を並べただけだと言い抜けすることもできる。書き手と読み手がメッセージを共有したときに皮肉や批判が伝わり、メッセージ



資料2-4

が共有されなければ皮肉・批判も悪意も伝わらないという風刺のあり方を見ることができる。

参考文献

- 坪井祐司 2014「カラムが切り取った世界：写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅴ：近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究情報統合センター、pp.9-18。
- 坪井祐司 2015「『カラム』が切り取った世界Ⅱ：1950年代中葉における東南アジア・ムスリムの世界観の変化」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅵ：***』(CIAS Discussion Paper No.**))』京都大学地域研究情報統合センター、pp.**。
- 光成歩「1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化」坪井祐司・山本博之編『『カラム』の時代Ⅴ：近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40)』京都大学地域研究情報統合センター、pp.19-23。